

## △討論要旨△

第三回研究会では、社会計画の一つの基礎視角として、「協働連関の両義性」という観点と、その立場からの農村計画の諸論点が、船橋氏によって提示された。

討論はまず、両義性ということの意味を問う（長谷川会員）ことから始められた。主体的な観点によって認識対象が構成されるというウエーバー的な考え方に基づけば、社会をいろんなベースベクトルから見ることができるとして、「存立構造論」という原理論によって協働連関の両義性は、経営システム・支配システム・主体的な行為の集合（対象的システム）という二重の意味での両義性が論理的に考えられると述べられた。この理論とバーソンズのAGIL理論との関連が高橋会員よりたずねられた。きれいな対応はつかないだろうとしながらも、この両義性論にひきつけて考えれば、バーソンズ理論は経営システムの文脈ではある連関について有効性をもち得るが、支配システムの文脈では钝感であるように思われるとされた。

続いて、理論の内容に関して若干の質問がされた。長谷川会員から、マクロ対ミクロの中における経営システム・支配システムの相互関係について説明がもとめられ、今の段階では詳細に整理されないとしながらも、論点としてマクロの文脈での支配システムのありようが個々の経営システムを条件づけており、また、支配システムと経営システムは実は一種のイレコ型の構造になっているのだろうと答えられた。マクロ・ミクロといった場合、ミクロとは地域計画と考えられるのか（高橋会員）との問い合わせに対して、一概に言えないが、両者の質的差として参加主体の主体的地位、担い手の性格の差異が考えられるとされた。高橋会員から、単にマクロ対ミクロということではなく、地域計画の主体とミクロの構成員（個々の農家とか個々の所有単位といったもの）との関係が最大の関心事なのであり、地域レベルでの資源分配の問題として、土地の所有と経営を分離しながらどういうふうに担い手に集中してゆくかといった現実問題は、経営システムのみでは解決できないものであり、支配システムを考える必要はあるが、それを現実にどう対応させるのかが問題であろうと指摘された。

ここで、基本的な疑問として、島崎会員から、このような一般理論を具体的現実に下した場合に抽象と具体との関係はつくのか、一般的抽象的な、たとえば支配システムという用語と具体である日本の農業を考える際の説明の概念とのギャップがどう埋められるのか、といったことが問われた。船橋氏から、この理論は都市における地域問題を念頭においたものであり、念頭において事例によって一般

理論が制約される面もある訳で、利用できる面があれば利用していただければと答えられた。

次にこの理論の現代社会分析の有効性に関しての論議が多少展開された。高山会員は、支配システムを考えてゆくときに所有もしくは所有権というものはどう位置づけられるのかとの問題関心から、現代資本主義を考える場合、かつての所有権よりも決定権の方が重要なのだといった論理で『現代資本主義の基礎理論』（岩波）が出版されているが、そういう意味で、支配システムを考える際の決定権の重要性を指摘しているのかとの質問がだされた。現代社会論といつたことでは射程に入れて考えている訳ではないしながらも、支配構造を見る場合、決定権は重要であると直接的に考えたものであると述べられた。決定権の背後に物的な基礎があり、それが基礎理論となるのではないか、と高橋会員より問われた。それは支配構造の具体的内実を歴史的に個々の社会に則して分析してゆくということであって、この両義性論という基礎理論より一步具体に近づいた水準での議論であるとされた。決定権と所有権の関係と支配システムの閉鎖的受益圈の階層構造との関連について柿崎会員より質問された。それに答えて、所有権の階層で定義しているのではなく、受益の程度によって階層づけられているとされた。また、船橋氏は経営システムの価値配分構造については、ここでいう価値とは使用価値であって、資源とか財と換言できると述べられたが、資源とか財を含めた価値生産構造との対比において考察されるのでなければ、ただ配分構造のみでは整合性をもち得るか疑問であると高山会員か

らするどい指摘がなされた。

最後に、吉沢会員から、社会的問題を解決に向けてどういうふうにこの両義性論で解決に至るのかとの問い合わせられた。両義性論をふまえて「対抗政策」を考えてみると、それは経営問題的要素をうまく解決してゆくことが一つあり、同時に平行して経営問題解決の前提として、被格差・被支配問題も解決してゆくことである。と定義できる。この「対抗政策」を具体的事例の中でどう議論できるのかということについては今後の課題としたいと述べられた。

村研ではめずらしく問題把握の基礎的視角に関する報告であつた為、その理論の意味を問うことにつき終始した感はあるが、両義性論といふ基礎理論が提供されたことは大きな収穫である。最大の関心事は、そのような基礎理論を現実の農業・農村問題、あるいは農村計画に如何に適用し、問題解決をはかつてゆくかということであろう。島崎会員が指摘するように、抽象的な一般理論と現実とのギャップをどう埋めてゆくか、ということは今後検討されねばならないだろう。

（荒穂 豊 記）